



町発祥の木彫「千瓢彫」  
唯一の伝承者  
中原 篤さん

【プロフィール】  
なかはら あつし  
昭和10年10月21日、  
木彫師・中原和一の長男と  
して生まれる。自宅敷地の  
庭や建物にアイデア溢れる  
オブジェを配した夢いっば  
いの「カントリーミュージ  
アム・木彫工房ナカハラ」  
を主宰。9:00から17:00ま  
で見学が可能。現在82歳。



町内鳩山地区の田園地帯にアトリエを構えて約60年となる木彫家の中原篤さん(82歳)は、町発祥の木彫「千瓢彫」という伝統工芸を守り、発展させてきた約60年間を振り返ってくれました。

父親とともに腕磨く

栗山高等学校を卒業した中原さんは20歳の時に千瓢彫創始者の故・本田数馬翁に父親とともに弟子入り。農業の傍ら、その技術を修得すべく腕を磨き、24歳で出展した「鮭の跳躍」が全道青年大会工芸部門で入賞、53歳の時に第6回北海道伝統木彫工芸展に出展した「シマフクロウ」で優秀賞(北海道知事賞)を受賞しました。千瓢彫の技術に裏付けされたその作品は木目を生かした味わい深い上品な作風。平成元年頃には月に1,000人以上の方が訪れるな

ど、注目の的となりました。また、「作品を単に作るだけでなく、どう発信していくのかも重要」と常に先を見据えています。

次世代に継承して

今でも時々、いきいき交流プラザ「サンタの笑顔」などの憩いの場に行き、積極的に情報交換を行うという中原さん。「自分は文化財を引き継ぐ役割があるように、他の高齢者の皆さんにも長い間培ってきたものがあると思う。それを若い世代に伝えてほしい」と呼びかけていました。今後の抱負を聞くと「何より健康が一番。体験教室なども予定していますが、記録する手段が増えたことで自分が行ってきたことを今一度整理し、映像に残すなどして伝承していけたら良いと思います」と意気込みを力強く語ってくれました。

編集担当者のひとりごと

▼先日、「くりやま食べて飲んでラリ」に参加しました。チケットを使って飲食店街をはしごできるイベントで、普段あまり入ったことのないお店にも入ることができてとても楽しい時間を過ごせました。いつもは、夜になると町内を歩いている人を見かけることが少ないですが、「こんなに栗山には人がいるのか!」と驚くほど、大変賑わいを見せていた夜でした。(伊藤)

▼6月からクールビズとなつていますが、今年は肌寒い日が続き、まだ1日も半袖を着ていません。季節の変化が例年以上に感じにくくなっています。さて、人事異動で多くの職員が異動となりましたが、私は残留となりましたので、これからもよろしくお願います。(田畑)

▼栗山町の魅力発信の一翼を担っている「くりやまちようPR隊」。先日もUHBの「みんなのテレビ」で町内の穴場や見どころを紹介してくれました。私(たち)もPR隊の活動に刺激を受けながら、積極的なまちの情報発信をしていきたいと思えます。(杉本)